



# 陶都瀬戸のあゆみ

*A History of Seto, Pottery Capital*

瀬戸は、市域の大半を占める丘陵とさらにそこから流れる河川によって豊かな自然が生まれ、一千万年以上前から形成された珪砂・陶土層があります。この豊かな自然を背景に、今から約千年前、白い良質な陶土を原料としたやきものづくりが始まりました。

以降、瀬戸のやきものづくりは絶え間なく進歩を遂げ、世界を代表とする陶都となりました。

Seto has rolling hills that form the majority of city area and rivers that flow from there. They have nourished abundant nature containing silica sand and clay layers created at least 10 million years ago. Having the backdrop of the rich nature, pottery making with high quality white clay started about 1,000 years ago. Techniques of pottery making have evolved, and made Seto a globally-renowned pottery capital.

## 陶祖と磁祖

Pioneers of Pottery and Porcelain

### 陶祖——加藤四郎左衛門景正(通称 藤四郎)

Pioneer of Pottery —— Kato Shirozaemon Kagemasa (Toshirō)

瀬戸焼の開祖といわれる人物。伝記によれば、鎌倉時代前期の貞応2年(1223)に曹洞宗の開祖である道元に従って中国に渡り、やきものの技法を学んで帰国しました。その後、やきものづくりに適した土を求めて全国を巡るなか、仁治3年(1242)に瀬戸の祖母懐でよい土を発見し、瀬戸で窯を開いたとされます。毎年、4月第3日曜とその前日には、その偉業を称える「せと陶祖まつり」が開催されます。



▲陶祖肖像画 梅瑛 20世紀前期

### 磁祖——加藤民吉

Pioneer of Porcelain —— Kato Tamikichi

江戸時代後期瀬戸の窯屋仲間の取り決めにより、陶業を継げるのは長男のみとされ、次男の民吉は家業を継げずになりました。名古屋で新田開発に携っていた民吉は尾張藩熱田奉行津金文左衛門の目に留まり、南京焼(染付磁器)の研究を手伝うことになりました。その後、文化元年(1804)に尾張藩や瀬戸の窯屋の支援のもと、単身九州へ修業に向かいます。いくつかの窯元で修業したのち、佐々の市の瀬皿山(現在の長崎県北松浦郡佐々町)の福本仁左衛門窯で磁器技法の習得に励みます。文化4年(1807)瀬戸に戻り、その技術を伝えたことにより瀬戸の磁器生産は急速に発展しました。こうした業績を称え、毎年9月第2土・日曜には「せともの祭」が開催されます。



▲磁祖肖像画 梅瑛 20世紀前期

## 豊かな自然に恵まれた人々の暮らし

Life Blessed with Rich Nature

瀬戸市内の上品野遺跡では、三万年前の後期旧石器時代の石器群が、品野西遺跡では、縄文時代草創期の尖頭器が出土しており、旧石器時代から縄文時代にかけて人々が暮らした証がみられます。瀬戸市域は尾張・三河の境界の地として、弥生中期までは三河地方の、弥生後期から古墳時代にかけては尾張地方の土器文化の影響を受けます。また、古墳時代中期から後期にかけて、丘陵地帯に多数の古墳が築造されます。



▲本地大塚古墳(市指定史跡)



▲品野西遺跡出土石器



▲品野西遺跡出土「豊」墨書須恵器

◀木造 十一面観音菩薩立像 (県指定彫刻)



▲定光寺本堂(国指定建造物)

## 尾張東部地域の拠点として

As the Center of Eastern Owari

平城京出土木簡の「山田郡山口郷」が現在の山口地区にあたりと考えられることから、奈良時代からこの地名があったことがわかります。品野地区では、奈良時代の大規模な集落や平安時代の祭祀具が出土しており、尾張東部地域の拠点的な集落があったと考えられています。

鎌倉時代になると、尾張源氏である山田氏が登場し、瀬戸のやきもの生産にも関わったものと考えられますが、承久の乱で鎌倉幕府方に敗れて勢力を失います。

室町時代になると水野氏や松原氏など在地の武士が台頭し、定光寺や雲興寺など、尾張北部から東濃・三河地方などの広い範囲で信仰された仏教寺院が創建されます。

室町 14 世紀 鎌倉 12 世紀 平安 10 世紀 旧石器時代 古墳時代・古代

## 瀬戸焼の始まり

Beginning of Setoyaki (Seto ware)

瀬戸市域に初めて窯が築かれたのは平安時代後期(10世紀後半)のことです。猿投窯からの流れをくむその窯では、釉薬が施された「灰釉陶器」が生産されます。11世紀末期にはそれまで行っていた施釉技法を放棄し、無釉の「山茶碗」などを生産しますが、12世紀末期からは再び施釉陶器の生産が始まります。これは「古瀬戸」と呼ばれ、鎌倉時代から室町時代の約300年にわたり、国内唯一の施釉陶器として日本全国に流通していきます。



▲広久手第30号窯跡(市指定史跡)



▲入子 針原2号窯出土 13世紀末期~14世紀初期 口径(最大)9.6cm



▲灰釉縄手付瓶 広久手F窯出土 (重要有形民俗文化財) 11世紀中期 高さ26.2cm



▲鉄釉仏花瓶 伝 百目窯出土 14世紀前期 高さ28.7cm